



嘘
USOTSUKI
月

杉山
幌

Illustration
キナコ

KODANSHA
BOX
POWERS
BOX



目次

File **1.** ジョージの斧
7

File **2.** ホワイダニット
35

File **3.** 畏の予感
65

File **4.** 白いリボン
95

File **5.** 魔女狩り
127

File **6.** 嘘月
157

File 1.

シヨージの斧



「ワシントン・テストっていう心理テストがあるんだ」
新しい携帯の液晶についたままだったフィルムを剥がしながら、おれは始めた。

「幼いジョージは桜の木を切ったが許された。実は、ジョージが父親に許された理由は『正直に告白したから』じゃなかったんだ。では一体何だったでしょう?」

これがワシントン・テストだ。アメリカでは割に有名な心理テストでカウンセリングなどにも利用されているというのは嘘で、実際は今さっきおれが考えたものである。

入学してまだ二週間経ってないこともあってか、朝の教室は賑わっているながらもよそよそしい雰囲気があり、余白を埋めるような挨拶の声が目立つ。

「父親は息子に、過ちを許すことの大切さを教えたかったんじゃないか?」

敬太郎は前髪を弄りながら、さらりと言った。

江田敬太郎。おれより十センチばかり背の高いこ

の同級生は、目立つ男だ。浅黒く健康的な肌、理想的な細マツチョ、長い手足、緻密に造作された無造作へアー。

それにしても、過ちを許すことの大切さときましたか。さすがイケメン脳。身も心もイケメン。出来過ぎていて胡散臭い気さえする。現に今も、見えないうように剥がしたフィルムに目ざとく気づき、一瞬だけおれの手に視線を送った。だが、何も言わない。こういう態度が少し、胡散臭いのだ。

「橘花は?」

敬太郎の隣、忙しく右に左に首振り手振り髪揺らしおはようおはよう言っている橘花を促すと、橘花は挨拶ノックを止めて微笑みをたたえながら口を開いた。

「パパはジョージを性的な目で見ていたからだと思うの」

「……それが何故許す理由なんだ」

「それは勿論『パパ……どうすれば許してくれる

の？」展開なの。パパの許し攻め」

「許して攻めるって矛盾してるだろ！」

更に許すなら攻めじゃなくて責めだろと思考したところで、ワシントン親子の秘め事を想像しかけて背中が総毛立ちそうになる。

坂本橘花。黒目がちのすこし眠そうな垂れ目は穏やかな印象を与え、か細い声は愛らしい。育ちの良いお嬢様然としていて、実際に家は金持ちだ。

しかし腐脳。男の同性愛を好むいわゆる腐女子。驚くべきことに、橘花はあらゆる意味で自分のことを隠そうとしない。見た目とのギャップが功を奏したのか、橘花は橘花で上手くやっているようだ。おれにとつても、今の所唯一普通に話す女子である。

だが橘花には悔れないところもあって、先ほどフィルムがついたままのおれの携帯を見て、何か違うとばかりに首を傾げていたのだ。

「理久は？」

「りっつ君は？」

敬太郎、橘花と続け様におれに聞くが、このなんちゃって心理テストは今さっきでっち上げたばかりなので、当然自分自身の答えなど用意していない。

だが、それを気取られてはいけない。先ほど入学のきっかけについての話題になりかけたのを嫌ってワシントン・テストを出したのだと、悟られる可能性が生まれてしまう。

上手く混じる。この教室に、この空間に、この人間たちに。おれには変な特徴は要らない。例えば、汚れを気にして液晶のフィルムをそのままにしておく、潔癖性のような。

「父親が息子を『許した』という先入観がポイントだな」

おれは自分が饒舌になる気配を感じながら、そう言った。

「先入観？」

「挿入感？」

「逆説」橘花のボケを無視して続ける。「チエスタ

トンばりの逆説だよ。父親が自ら許したのではなく、ジョージが父親を許さざるを得ない状況に追い込んだんだ。ジョージは斧おので桜の木を切った。そして父親が現れた。状況証拠は揃そろっている。物的証拠すらある。しかし、父親は許さざるを得なかった。ここまで言えばもうわかんדרる？」

「もうわかんדרるって言われてもな、俺おれはわかんないな」

「わかん、パパとジョージのもう和姦わかんだろ……」

「答えは一つ」やはり橘花のポケを無視して、おれは得意げに言う。「ジョージはまだ斧を手に持っていただけ」だよ」

決まった。気分が良かった。体の芯しんから熱が湧き上がってくるような。

おれは、重度の探偵脳なのだ。

「おーなるほど、面白いじゃん。さすがにちよっと探偵っぽいな」

「ぼいは余計だぜ敬太郎」

探偵絡みで褒められると、つい調子に乗ってしまうおれだった。

「パパ×ジョージじゃなくて、ジョージ×パパだったの。りっ君の趣味がわかって嬉しい。来た時から今日の教室は白が眩まぶしいと思ってたの、りっ君オーラだったの」

「そんなオーラ出してない！ お前らの頭の中には攻め受けしかないのか！」

「私たちには、全てを攻め受けに分ける能力が備わっている……」

「なんというCランク能力……」

諦あきらめて首を振る俺だったが、

「すっかり橘花ワールドに溶け込んでるな」

なんて敬太郎が言うから、

「フリだっつの」

と本音が口について出た。しまったと思う間も無く橘花は演技がかったやり方で目を見開き、おれを撫なでようと伸ばしかけた手をわなわなと震わせ、酷ひど

い辱めを受けたとその表情で主張する。

「冗談冗談、友達友達」

単語を書き写す時のような気持ちで言葉を紡ぐと、橘花は宙ぶらりんになっていた手を再び伸ばし、おれは細い指が髪を撫でる柔らかい感触を甘んじて受け入れた。溶け込む、という敬太郎の言葉に過剰に反応してしまった自分への罰として。

溶け込んではいけない。混じるが、溶けない。水の中の、一粒の砂のように。おれは教室で過ごす全ての日に、自分にそう言い聞かせている。

そして、和やかな雰囲気の中。

「——ホント嫌になる」

棘をむき出しにした呟き声。敬太郎と橘花はおれの隣を見るが、おれは見ない。

「どうしたんだよ瀬谷、ご機嫌斜めだな」

敬太郎があくまでも普通の口調で言う。入学から二週間弱、ご機嫌真っ直ぐだったことなんてないこの女に、こんな風に接するのはもはや敬太郎だけ。

瀬谷伊音。

天然であろう茶色がかったボブに、少し釣った大きな目、桜色のやや薄い唇、白い肌。全体的に色素が薄く身体も細い。入学式で初めて見た時には目を奪われ、教室に移動して隣の席と知り、幾分か幸運に思った。

それから二週間、なぜかおれは瀬谷に物凄く嫌われている。

おれを睨むか、イヤホンで音楽を聞いているか、教室に居ないか。

「そうだ」敬太郎はめげずに瀬谷に話しかける。

「瀬谷聞こえてた？ さっきの心理テストのやつ。」

瀬谷はどうよ？

そしてようやく。

瀬谷伊音はため息とともに、口を開いた。

「父親が息子を許したのは、信じていたから——」吐き捨てるように言った。道徳的な答え。そう聞こえたのはあくまで一瞬だった。「——ワシントン家

は代々奴隷^{どれい}プランテーションを経営していたから父親は桜の木を切ったのは薄汚い奴隷どもで私の可愛い息子は薄汚い奴隷どもを庇^{かば}って嘘をついている素晴らしい子だと思い、奴隷を更に搾取しようと決意しましたとさ」

あつげに取られるおれたちをよそに、瀬谷はその小さな耳に突き刺すようにしてイヤホンをセットした。ホント嫌になる。その口癖をもう一度繰り返して。教室というろ過装置、瀬谷伊音という不溶性物質。近くて遠い、隣同士。

「瀬谷ってS特なんだってな」

運動した後とは思えない涼しい顔で敬太郎は言う。おれたちは一限の体育を終えて校舎に向かって歩いている。年功序列の逆で一階が一年、三階が三年の教室となっている。疲れた後ではそれが助かる。

「S特？ まじで？」

おれは驚いたように返したが、すんなりとその事

実を受け入れることが出来た。瀬谷伊音がSランク特待生というのは、似合っているように感じられる。「そう、S特。学費等全免除、どの時間にどの授業を選んでもいい」

すげえな、とおれは素直にそう言った。我が織^{オリ}乃学園は生徒の能力別ランク分けが細かく、特待生の中にもSからCまで四つの等級があつて、上に行くほど扱いが良くなる。

「すげえよな」敬太郎は頷^{うなず}く。「ていうかその瀬谷は体育いたっけ？」

「サボリだろうな」

瀬谷伊音はよく体育をサボる。その姿は女子の中に確認出来なかった。

「サボリか。まあS特なら許されるんだろうな。俺もサボリや良かったかな」

クラス一の好成績を残した敬太郎は、首を鳴らしながらそう言った。

「……てことはまさかお前」

「うん、Sだよ」

「じゃあすげえなとか言うなよ！ マラソンにおける『一緒に走ろうねニコッ☆』的な何かを感じたよ今！」

「いやいや、実際俺にしてもすげえよなって思うんだよ。至れり尽くせりで」

瀬谷と敬太郎は、良くも悪くも目立つ二人だ。クラスでは突出した存在である。その二人がSというのは、順当といえばそうだろう。ちなみに、他にこれが等級を知っている生徒は、最初から隠していなかったA特の橘花だけだ。

「お前は？」

「お察しの通りでございます」

「Aか？」

「低っ！ お察し力低っ！」

「じゃ、B？」

「……一般ですみません、生まれてきてすみません」

「そうか……いや、お前は目に付くからさ」

SとCの下、最底辺である一般生のおれが目に付くのか。それは困る。おれは注目を浴びたくない。

「そういや瀬谷って」とおれは話題を逸らした。

「誰とも喋らないよなあ」

「そうだな。鈴ちゃん先生とは超仲良いんだけどな」

鈴ちゃん先生というのは担任で、背が低く眼鏡をかけていて女子大生のように見える幼い外見をしているが、れっきとした教師である。

おれの脳裏に瀬谷と鈴ちゃん先生の姿が浮かぶ。

この前たまたま職員室に行った時に二人が仲睦まじげに話している場面に遭遇した。まるで姉妹のように笑い合う二人。

「Sにはスカウトが来るからな。瀬谷のスカウティングをしたのが鈴ちゃんだってね。あれでも瀬谷って中学時代に比べればだいぶおとなしいらしいぜ？ 自分の所為で先生に迷惑がかかるのが嫌なのかもな。そう考えると、悪い奴でもなさそうだ」

敬太郎は全く乱れていない髪を弄りながら、横目

でちらとおれを見る。

「なんだよ」

用心しながら聞く。他意があるように感じるのは勘ぐり過ぎかそれとも。

「いや別に？」敬太郎は軽く眉を上げる。「せっかく隣なんだから、仲良くなってくれば良いなあつてね」

流れるような敬太郎の口調とは逆に、おれは少し口ごもり曖昧あいまいに返事をした。敬太郎と話していると、時々誘導ようどうされているような気分になる。

「つうか理久、瀬谷に見られてるのって、どんな気分なの？ やっぱどぎまぎするの？」

下駄箱にたどり着いて、靴を履き替えながら敬太郎は聞く。

「気分？ まあ、気まずいというかね。一言でいえば迷惑めいわく千万なわけで」

「そうか。でもまあ、そんなに嫌ってやるなよ、同じ人間じゃないか。心当たりは？」

「無い、まったく」

本当に無かった。気にはなる。が、おれには関係無い。瀬谷のような人間に興味は持たない。おれは教室に埋没し、流行の日常系の生活を送るのだ、今は。

そう考えたところで、教室に着いた。だいぶ早く引き上げたおれたちだったが、サボリの瀬谷伊音を含めると、既に四人の生徒が教室にいた。

瀬谷を除く三人の生徒が、教室の後方で固まっている。瀬谷伊音だけがホワイトボードの前に立ち、俯うつむいている。

信じられないような光景が、あった。

ホワイトボードが赤い。血糊ちのりだろうか。血しぶきの真ん中に、真紅の文章。

『異常者の集まる織乃学園に罰を』

そのメッセージを見ながら、おれは敬太郎の言葉を反芻はんそうする。

——そんなに嫌ってやるなよ、同じ人間じゃないか。

「昨日のことですが」鈴ちゃん先生は真剣な表情で、一人一人に語りかけるように言う。「まず、怪我人は出ていないので安心して下さい。あれは血に似せた液体でした。ですから、傷害などは無い窃盗事件です。皆さんもご存じの通り、先週も似たような事件が起きました。教師の中では、同じ外部犯ではないかという意見が大勢を占めています。今回は先週の事件と違って窃盗の被害が出てしまいました……。被害にあった方は、今配布したプリントに盗まれた金額と品物を記入して、帰りのホームルームの時に提出して下さい。被害がエスカレートしているので皆さんも不安だと思えますが、学校側も全力で調査していますので、どうか口外こうがいしないようお願いいたします」

最後にベこりと頭を下げ、鈴ちゃん先生は少し疲れた顔で教室から出て行った。小柄な彼女の背中がいつも以上に小さく見える。普段よりも早く終わった朝のホームルーム。しかし、教室には重い空気が

澱おがのように沈殿している。

「先週のは俺が来た時にはもう消えてたけど、この目であんな文章を見てみると、嫌なもんだよな。昨日の夜、寝る前に思い出しちゃったよ」

近づいて来た敬太郎は首を横に振りながらそう言った。

「先週のは遥はるかかにマシだった。つうかおれの六千円返せよな……」

おれはため息をついた。先週も、おれたち二組の教室で事件が起きた。朝登校した生徒が同じようにホワイトボードに書かれたメッセージを発見したが、その時はただの赤いマジックで、『欺瞞ぎまんだらけの織乃学園』と書かれていた。殴り書きで、しかも瞞まの字が間違っていたらしい。当然盗難も起きてないの、今回とは違い半分は笑い話で済んでいた。

「私はメッセージを見なくて良かったの。せめてもの救いなのかな」

プリント片手に寄ってきて、しみじみと頷く橘花

だった。橘花を含め、体育から帰ってくるのが遅れた生徒たちは現場を見ていない。その後、帰ってきた生徒が五、六人増えた辺りで鈴ちゃん先生がやって来て、おれたちは自習室へと移動させられ、結局二限を体操着のままそこで過ごす羽目になった。

「せめてものつてことは、橘花も盗られた組か？昨日は何も言ってなくなかった？」

あのメッセージを見た現場組が十人に満たないのと同じように、全員が窃盗の被害に遭ったわけではなかった。おれを含めて、窃盗の被害に遭ったと騒いでいたのは十三人だった。橘花が盗られた組なら、十四人目の被害者となる。

「うん、昨日はりつ君が私の分まで怒ってくれたから」

「そうか、おれたちはやはり友達だな」

「おいおい、俺の鞆たばたは無事だったけど、俺も現場組だぜ？」

「ふっ、金はそれだけ重いのだよ。誰かが言っていた？ 友情は金では買えない、だが売れることは容易たやすだぜ？」

く可能だ、とね」

おれは気取った声色を作りながら軽口を叩いた。敬太郎は現場を見て橘花は金を盗られた。つまり、イケメンでもお嬢様でもないおれが最も損をした形になる。おかしい。

「でも私はお金だけだったから良かったの。りつ君は大切なデジカメも盗られちゃったんだもんね？」
「ああ、うん、そうだな。あれは痛かったなあ」

少し狼狽ろうばいしながら返事をした。昨日おれは、六千円に加えてデジカメも盗まれたと騒いだのだった。他の生徒のデジカメが盗まれていたことも勘違いに拍車をかけた。が、おれのデジカメは家で発見無事保護された。鞆たばたに入れていたと勘違いしていたのだ。大騒ぎしただけに、今更言えない。

「おれは良いとして」気まずさから目を逸らして言う。「橘花は被害小さかったのか？」

「うん、まあ……」

橘花はちらりとプリントに目を落とし、手を後ろ

にやろうとする。

おれの探偵脳が嘔そげいた。怪しい、と。

「おっと激しくそして滑らかに手が滑ったあ！」

「やつ！」

おれは橘花のプリントを奪った。探偵は事件に関する情報収集を恐れてはいけないのだ。

だがしかし、おれは一瞬で後悔した。十二万円。

犯人も大満足だろう。

「やつぱりお前も友達じゃない！ ブルジョワジーめ！ 労働者の敵め！」

「返して……」橘花は少しむっとした様子でプリントを取り返す。「……もう、りっ君の悪いとこだよ」

「すまぬすまぬ」

橘花が怒り気味なので話を変えようと思い、

「やー、犯人早く捕まると良いなあ」

と伸びをしながら軽い口調で言った。

すると、すかさず。

「——言いたいことがあるならはつきり言えば？」

おれの左隣から、突き刺さるような声が出た。敬太郎と橘花だけでなく、聞こえた全員が、凝視はせずにそれでも注目しているのが手に取るようにわかる。

「別に瀬谷のことを疑ってなんていないよ」

敬太郎が諭すように、少し柔らかい声でそう言った。このタイミングでさらりとそう言えるのはさすがのイケメン脳である。

「私も疑ってないよ。でも、私たちの会話がそんな風に聞こえてたらごめんなさい」

橘花はしゅんとする。女の瀬谷相手では、さすがの腐脳も発揮出来ないらしい。

「……別に……そうなら良いけど」

歯切れ悪くそう言った。さしもの瀬谷伊音も多少は弱気になっているのだろうか。

はつきり言って、瀬谷はものすごーく、疑われてる。

無理もない。あの時、ただ一人ホワイトボードの前にいたのが、排他的で有名な瀬谷伊音。二限を過

ごした自習室の雰囲気は異様だった。生徒たちが、やはりただ一人制服だった瀬谷をどう見ていたか、想像に難くない。

「ふん」瀬谷は鼻を鳴らした。「その人は疑ってるみたいだけどね」

普段からささくれ立っている瀬谷だが、おれに対しては明らかな敵意を感じる。しかしおれはそれでも瀬谷を見ない。こういう奴には関わり合いにならないのが一番だ。

「そうでしょ？　なんで返事しないの？　はいはい私が犯人ですよっと」

おれは息を呑んだ。

心臓が一度強く打ち、体の芯が痺れ、小さなノイズが耳の奥で轟く。

瀬谷は席を立ち、早足で歩く。海が割れるように、瀬谷が近づくと生徒たちが次々と目を逸らす。

「なんで瀬谷は理久に対してだけあんなキツイのかね」
「りっ君も、疑ってないよ、って言ってあげないと

駄目だと思うの」

おれは二人の言葉に返事をせずに立ち上がった。瀬谷はやってしまった。おれの探偵脳にスイッチを入れてしまった。

「おい待てよ犯人」

階段の踊り場で、激しく振り返った瀬谷の腕を強く掴む。

「違う！　ふざけんな！　放せ！」

おれはぱっと手を放した。瀬谷は勢い余って腕を回しながらよろけて踊る。

「そうか。じゃあおれと犯人を捜そう」

腕を上げたまま、瀬谷の動きがストップした。

「……は？」猫目を丸くする瀬谷。「何……言ってるの？」

「言葉通りだよ。いちいち他人の言葉の裏を勘ぐってたら探偵脳になっちまうぞ」

「意味わかんない……だって、だってキミは、私を

疑ってるじゃないか」

動揺しているのか、聞いたことのないような声、口調だった。

「いいや、疑ってないよ」

おれはきつぱりと言う。本心だった。

瀬谷は驚愕した表情で、おれの顔をまじまじと見る。普段おれを隣の席で睨んでる時とは違い、瀬谷に見つめられると、何か不思議な感じがした。透き通るような。

「そ、そうだったとして、なんでキミと犯人捜しなんてしなきゃいけないんだよ！」

「ちよっとした個人的な事情があつてね、犯人でもないくせに自分を犯人だつて言う人間は絶対に許さないことにしてるんだ。その意味でお前はもう観念した方がよいぞ」

そう、瀬谷は自分を犯人だと言ってしまったのだ。

「何それ……キミは一体……」

「まあとにかくだな、お前だつて疑われたままじゃ

イヤだろ？ 先生がやたら外部犯で強調してたのも、

あれつてお前の為だろ？ お前が自分を犯人だつて言つたり、そんな態度じゃあ鈴ちゃん先生も悲しむんじゃないか？」

「——っ！ ズルい言い方！」

瀬谷の表情が変わり、視線が熱を帯びる。やはり先生は瀬谷にとって特別な存在であるのだ。敬太郎からの情報を利用するのは少し癪ではあるが、選り好みしてられない。

「鈴ちゃん先生だつて早く解決した方が気が休まるだろ。おれはさっき言つたとおり自分の事情で捜査しただけだから、別に感謝する必要も無いしな」

「はっ」瀬谷は強く息を飛ばす。「今はそう言うし本当にそう思つても、実際解決したら後になって恩着せがましくなるんだよ、キミみたいな人は」

「ただだけ疑り深いんだよお前は。はつきり言うけどな、お前と仲良くしたいとか、まったく無いからな」

「こちらこそ願ひ下げ。私には友達なんて要らない」

「奇遇だな、おれもだよ」

「……正直だね」

瀬谷伊音は、睨むでもなくおれの目をまっすぐ見てそう言った。

もう一度、透き通るような、少し不思議な感じがした。

「……どうして、私じゃないって思うわけ？ 自分で言うのもなんだけど、キミが私を信じる根拠なんて無いはずだし」

瀬谷の声に、先ほどまでの頑たくなさがほんの少し和らいだように感じる。

「お前を信じてるんじゃない、自称犯人を信じてないんだ。それに、あの時お前がホワイトボードの前に居たのって、皆が帰ってくる前にあのメッセージを消そうとしてたからじゃん」

「な！ ……んで……」

瀬谷は驚愕の表情を浮かべ、追って頬ほおが紅潮し始める。

「引っかけたな、意外に良いところあるじゃないか」

おれは口角を上げた。カマをかけたのだった。瀬谷が犯人でないならわざわざあそこに近づいた理由はこれだろう、という推測が見事にハマった。

これで、瀬谷自身を信じる事が出来る。

「……キミ、性格悪すぎ」

「お互い様だろ？」

「じゃあ私も、引っかけたフリをしてるのかもしれないよ？」

「だったらおれは、騙だまされてやるよ」

そしてようやく、瀬谷は諦めるように目を伏せた。

探偵といえど聞き込み。ということ、一限をサボって瀬谷への調査に費やした後、職員室に向かった。

「鈴ちゃん、ちょっといい？」

敬語も使わない瀬谷だったが、おれに対する口調とは違い親しみがこもっている。

「どうしたの？」 鈴ちゃん先生は目を丸くする。

「佐々木君と一緒に珍らしいね」

「珍しいどころか初めてだよ。なんかね、この人が探偵ごっこしたいって」

ええ？ と鈴ちゃん先生は目を細めて笑った。馬鹿にしてる感じではなく、微笑ましげにおれたちを見る。まるで弟妹を見守るように。

「そうです。おれがこの事件を解決します」

照れていても仕方ないので、言い切ってみた。若干、気持ちよかった。探偵力がおれにとっての、ジョージの斧のような存在であれば良いのに。

「解決って……どういうこと？」

「先生の立場はお察ししますが、外部犯は無いと考えています。先週と違い、今回は授業中だった。忍び込んだ時間に、たまたま一階に空いている教室があった、というの考えられない。つまり犯人は、二組の一派が体育だと知っていた人間です」

「なるほど……本当に探偵さんみたいねえ」

先生は驚いたような表情でおれの顔をまじまじと

見る。瀬谷の方は、今言ったことをすでに散々説明したこともあつてか確認するように頷いている。

「犯人を見つけないんです。警察力が無いんだから、自分たちでやるしかない」

織乃学園は、昨日の件をまだ警察に届けていない筈だ。昨日も今日も警察の姿を見えない。公立の学校でさえ、自殺者が出るほどのイジメを隠蔽するのだから、この学校なら昨日の事件くらい隠そうとするだろう。

「そうだけど……」先生は少し逡巡する。「生徒同士で疑ったりは……」

「瀬谷の疑いを晴らしたいんです」

「え？ そうなの……」意外そうに、瀬谷とおれの表情を交互に確認する。「うん……でも、トラブルになるようなことはしないでね？」

「それは約束します」

「そしたら私がチクるから大丈夫！」

余計な口を挟む瀬谷を一睨みして、おれは質問を

開始した。

「ではまず、先生はホームルームが終わった後、瀬谷に声かけてましたよね？」

「うん、体育はちゃんと出なさいって言ったのに、この子は『出る出る』って言って結局一限終了間際まで、いつものウサギ小屋にいてね……」

「ちよつと鈴ちゃん！ 何言ってるの！」

「あれ？ 佐々木君には言ってるの？ ごめんごめん」

そう言つて鈴ちゃんはからからと笑い、頬を膨らませる瀬谷の腕を撫でた。

「お前……いつも授業サボつてウサギ小屋にいたの？」

「……悪い？」

瀬谷はむすつとして横目でおれを見る。学校で飼育しているウサギの小屋は、校舎の裏手にある。瀬谷は動物が好きなのか。

「ええつと」おれは気を取り直して続ける。「犯人

は、一限の間に最低十分間自由に動けた人間だと思ふんです。あの手の込んだメッセージを描いて、十数人分の鞆を漁るのには、最短でもそのくらいはかかりますから」

「うん、そうだね。内部犯かどうかは置いて、私もそう思うよ」

「では先生は一組で一限の授業してる最中、一度も教室から出ませんでした？」

「ちよつと、何その言い方。キミまさか鈴ちゃんを——」

「いいのよ」と鈴ちゃん先生は口を挟む。「探偵さんだもんね？」

「助かります」

「ああでも私」先生は悪戯いたずらっぽく笑う。「疑われるのかな、一度教室を出てるから」

「それは何故ですか？ どのくらいの間ですか？ 九時何分頃？」

おれは淡々と聞く。瀬谷と違つておれには先生と

の信頼関係は無いのだ。一限の間に一度抜け出して
いる鈴ちゃん先生。もし先生に時間があれば――
「おトイレだよ」噴き出すように先生は言った。

「四十分になる前くらいだったかなあ。抜けてた時
間は二分くらい。それで、その後授業が終わって二
組の前を通ったらああなつたのね。みんなを自習
室に行かせた後、学年主任の先生に電話で指示を仰
いだら、すぐに自分が行くから待ってろと。五分も
かからずいらっしやっただよ」

「なるほど。他に変わった様子は？ 逆に生徒が席
を立ったとか誰か通ったとか」

校舎の構造は両端に階段、真ん中にトイレを挟ん
で二教室ずつ並ぶ。トイレの正面から渡り廊下が伸
びていて、教室棟からこの職員室や自習室などがあ
る別棟に行ける。

「いや、一組では他に席を立った子は誰もいなかったよ。廊下を誰が通っていたっていうのはわからないな、ドアも窓も閉まっていたし」

「わかりました。ありがとうございました」

おれは軽く頭を下げた。先生に対する質問は終了
し、アリバイ的に疑惑も晴れた。

「いえいえ。頑張っただけ二人とも」先生は悪戯つぽ
く瀬谷を見る。「私は伊音ちゃんにお友達が出来て
嬉しいよ？」

「ちょっとやめてよ鈴ちゃん！ こんな人友達なわ
けないし。この人には友達なんていないんだ、どう
せ彼女だって出来たことないんだから」

「友達なんてお前だっていいねーだろ、彼女いない歴
なんて話してもねーし」

「おやおや？」瀬谷は手を広げ、挑発的な視線を寄
越す。「まるで過去に彼女がいたような言い草だね」
「あ？ 恋愛未経験なわけねーだろ」おれは大胆に
盛った。「ま、長続きしなかったけどな」

「ぶぶぶぶうっ」瀬谷は口で手を押さえ頬を膨らま
せ、露骨な笑い方をした。

「こら伊音ちゃん、ダメでしょ？」

たしなめる鈴ちゃん先生だったが、どこことなく瀬谷と通じ合つたような、軽い笑みを共有する。おれはそんなにモチなそうに見えるのか……。

「この子つたら……」先生は呆れ顔で瀬谷を見る。

「ちゃんと仲良くしなさいね？」

「嫌だよ！ 何度も言つてるじゃないか、私は鈴ちゃんがいればそれで良いの。こんな学校に友達なんて要らないし」

「もう……佐々木君、お願いね？」

先生はおれの顔をちらりと窺う。おれが瀬谷を見ると、ふんつと目を背けた。

「おう、帰つて来たか青春野郎。いやー、公認カッブルだなおい」

生徒たちの熱視線を感じながら自分の席に戻ると、敬太郎がおれの腹を叩いた。

「ちげえよ……」

言いながらため息をつく。予想はしていたが、や

はりこうなるのか。あんな風に教室を飛び出して追いかけて、授業までサボれば無理もないか。一見してわかるこのムードを嫌つて、教室に入るなり踵を返した瀬谷は正しい。

「りっ君……」

悲しそうな声が後ろから聞こえる。振り返ると、こんな表情は見たことないというくらい沈痛な面持ちをした橘花が立っている。

この勘違いムードの中、一人辛そうな橘花。こいつ、もしかしておれのことを――

「……どうして女の子なの？」

寂寥せきりょう、感の濃い風が、おれの心を通り過ぎた。なんだかどつと疲れたような気がして、落ちるように自分の席に座る。

「あんな、おれたちは事件について調査してんだよ。だから、お前らの思っているようなことは一切無いの、わかった？」

「わかったわかった」敬太郎が絶対わかってない声

で言う。「それじゃ、犯人を挙げて瀬谷エンドを迎えられるように頑張ってください」

トイレ行ってくるわ、と言い残し、笑いながら敬太郎は席を立った。

「でも偉いねよねりっ君」橘花は嬉しそうにまなじり 眦を下げる。「瀬谷さんの為に探偵するなんて。私の中でりっ君のポイント上がったっぼいの」

「ぼいは余計だぜ橘花」

「ント上がったの？ 意味わからないよ？」

「取り方が違うだろ！ まったく、お前もボケ倒してないでたまには役に立つことを考えろよ。頭ん中男×男のことばっかなんて不健康だぜ？」

「そんなことないもん」橘花は少し頬を膨らませる。

「男の子と女の子のこともわかるもん」

「おおそれは初耳すなあ、すごいすごい」

取り合わないおれに、橘花はほんんと唸うなって周囲を見渡した。おれ達の近くには生徒はいない。それを確認しているように見受けられた。

「——赤が、ふわっと浮き上がったの」

「……え？」

「さっきの瀬谷さんの顔、真っ白なほっぺに赤がふわっとしてたの。ほらね？ 男の子と女の子のこともわかるでしょ？」

橘花の言葉に先ほどの瀬谷を思い浮かべるが、顔など赤いように見えなかった。

「お前それ、おれをからかおうとしてないか？」

「本当なの。人の顔色を窺わせたら私の右に出る者はいないの」

それってなんだか悲しいな！ なんて言おうとして——何かが、ひっかかった。

頭の中で、一瞬静電気が走ったような感覚がする。「きつと照れてたの。意識してるんだよ、りっ君を。他の子に言っちゃダメだよ？」

「いや……」

おれは口ごもる。瀬谷がおれを意識していたかどうかではなかった。意識といえやおれだって多少は

してるだろう。だが、そんなことより、先ほどからおれの探偵脳が異常なまでに回転している——

「ああ……これだ」おれは口に手を当て、独りごちる。「——わかった」

とつくに、推理は可能だった。

「橘花、一つお前に聞きたいことがある」

「どうしたの？ そんな急いで。まさか犯人わかったとか？」

「いや、わからないよ。ちよつと図書室で調べ物だ」

これが数分前の会話。教室の前でぶつかりそうになった瀬谷をこんな風に誤魔化して、彼女から足早に離れた。

そして今、おれは自習室にいる。昨日の二限を過ぎず羽目になった自習室。体操着の生徒の中心一人制服で、壁に寄りかかって俯いている瀬谷の姿を思い出す。

五限の開始を告げるチャイムが鳴り、おれは口を

開く。

「——先生、なんであんなことしたんですか？」

誰もいない自習室に、先生と二人。瀬谷には言えなかった。瀬谷が唯一心を開いている人物が犯人だったなんて。

「何を言ってるの？ 大事な話っていうから来たのに。もう授業始まっちゃったよ？」

先生は無表情に、おれの顔を見ている。手には現代文の教科書やらを抱えて。

「良いでしょう、シラを切るつもりなら一から説明します。ヒントになったのは橘花でした。白い頬に赤が浮かび上がっている、なんて橘花が言いましてね、そこで何か凄く引かかったんです。その正体は昨日の朝、橘花が何気なく口にした言葉でした——」

橘花は言った。「来た時から今日の教室は白が眩しいと思ってたの」

「——おれたちにはいつも通りでも、橘花には昨日

の朝の教室は違って見えた。違っていたのは、ホワイトボードだったんです。昨日の朝は、ホワイトボードに白のフィルムが貼^はってあった。そう、白の向こうにある赤が浮き上がらない程度に厚い白いフィルムが、ね」

先生は相変わらず無表情を崩さない。が、それはおれの推理が核心に迫っていることを意味しているように感じられる。

「……そうだったとして」先生の声色は硬い。「それで何故私が犯人になるの？ 私にはとてもあんなことする時間は無かったけど」

「いや、ありました。そもそも、何故そんなフィルムを使ったのか。それは、時間稼ぎですよ。今回のメッセージが手の込んだものであったのも、同じ理由でしょう。先生は時間が欲しかった。生徒たちの鞆を漁る時間が——」

そう。おれは勘違いしていた。あのメッセージを書くこと、そして金を盗むこと。それらは一限の間

に行われたのだと。

「——考え方が、逆だったんだ。メッセージと窃盗真相は、どちらか、一限の間には行われなかった、です。メッセージを書くのは当日の朝早くで良い。先週の事件と同じです。しかし、昨日はフィルムで隠した。そしてフィルムを剥がすだけなら、『トイレに行った』二、三分で充分。剥がしたフィルムは丸めて教卓の中にも入れといたんでしょう。そしてあのメッセージが生徒により発見され、先生は何食わぬ顔で生徒たちを自習室へと追いやり、鞆を漁り始めたというわけです。フィルムもその時回収した。つまり、メッセージは一限の前、窃盗は一限の後だった——」

想像する。先生はおそらく生徒全員を送った後、教室の鍵^{かぎ}を閉めた。あの悪質なメッセージが生徒たちに見られないように、という大義名分が成立するからだ。そして同時に、誰にも見られず邪魔されずに鞆を漁ることが出来る。

「——学年主任の携帯にかけるまでに、数分は漁ってたんじゃないですか？ 到着後は、狼狽を装いながら対応すれば良い……」

おれはそこまで言うのと、一つ息をついた。

この計画はよく出来ていると思う。犯行が一段であれば、朝自分がホワイトボードを使わなければ良い。万が一、朝自分が来る前にフィルムを剥がされたりすれば、盗難は起きずに、二週連続の落書き事件で終わっていたのだ。

「……証拠はあるの？ なんて言いたいところだけど、言えないなあ……ねえ佐々木君、どうしたらいいと思う？」

「動機次第ですね。おれとしても、事を荒立てたくはないんですよ。なぜあんなことをしたんですか？」

一周して最初の質問に戻る。こればかりは本人の口から聞かないと推理しようもない。本丸はこれだと、おれの探偵脳が告げている。

「それは秘密」

「それで逃げおおせるとでも？」

「誰にでも、知られたくないことってあるじゃない」眼鏡の奥の目がおれを強く見据^すえる。「佐々木君にも、あるよね」

疑問ではなく、断定。

——間違いない、知っている。

おれがこの学校に入学した理由を。あの女から何か聞いたか——

二つの視線がぶつかり、真空が走る。

それを打ち消すように。

カチ、という音が聞こえた。

「……どうして？」

振り返るとそこには、瀬谷伊音。尾^つけられていたのか——

「……どうして鈴ちゃんが……異常者って、鈴ちゃんも私のことそう思ってるの？」

「違うの伊音ちゃん、そんな風に取りたくないで、私は

「そう思ってるから書いたんだよ！」瀬谷の声が割れた。「みんなみんな嘘ばっか！ 嫌い！」

鈴ちゃんなんて大嫌いだよ！」

瀬谷の表情を見て、震えた。蒼白そうはくの顔面、頬をつたう涙、唇の端に溜たまる泡。歯の根が合わずカチカチと鳴っている。瀬谷の体が一度びくと弾はじけ嘔吐おうとした。目を疑った。信じていた人に裏切られたとはいえ、どうしてここまで……

「落ち着け」なんとかなだめようとする。「人が死んだわけでもないし大した事件じゃない。知ってる通りおれの被害だって、六千円とデジカメくらいのもんだしな」

そのデジカメだって実は、と続けようとして――

「嘘つき」

おれを見る瀬谷の瞳孔どうこうが、一瞬開いたように見えた。

「デジカメは、見つかったんでしょ？」

瀬谷の言葉に、おれは固まった。

その通りだった。だが瀬谷にも誰にもそれを告げていない。フラッシュバックのように頭を駆け巡るデジカメのこと、聞き込み時の先生との通じ合ったような笑顔、おれを尾けてきた理由、そしておれを嫌っている瀬谷――

「お前……まさか……」

瀬谷はおれの言葉にならない問いに苦しそうな顔で笑いながら――

「私には、嘘がわかるんだ」

そう言った。嘘がわかる。普通なら信じられない。しかし、確かにそれしか無い。

瀬谷伊音には、嘘がわかるのだ。

「気持ち悪い？ 気持ち悪いでしょ？ 異常者だよ、異常者なんだよ！」

瀬谷の叫びを聞いて、あの真紅のメッセージが頭をよぎる。

『異常者の集まる織乃学園に罰を』

各種学校織乃学園。敬太郎が言っていた通り、ち

よっと変わった奴が多いけど生徒たちは皆普通の人間だ。ただ少し人と違った能力を持っているだけ。

常人離れた色覚で僅かな色の違いをも見分ける橋花のように。そして、嘘がわかる瀬谷のように……。

「なあ瀬谷、おれはお前を異常者だなんて——」

「嘘がわかるって言ってるでしょ！ 優しい嘘も、わかるんだよ……」

瀬谷は涙を拭いて、机に手をつきながらよろよろと歩き出した。その細い背中を見て思う。瀬谷伊音は、望まない斧を持たされた子供なのかもしれないと。

「その兎たちは、お前のブロンディなのか？」

校舎裏手のウサギ小屋の前、やはり瀬谷はそこにいた。

「……何しに来たのさ。慰めとか、要らない。言っとくけど、私の嘘のわかる能力はほぼ百パーセントだからね、下手なこと言わないほうが良いよ」

瀬谷は膝を抱え俯いたまま、ぼそぼそと喋る。

「ほぼ百か、そいつは凄いな。でもおれはな、慰めじゃなくて忠告しに来たんだよ、このままじゃヒトラーみたいになるぞって」瀬谷は顔をずらし、上目遣いにおれを睨む。「ヒトラーが溺愛した愛犬ブロンディ。大きな力を持った人間が疑心暗鬼になり動物を好むなんて、ありがちな話だ。動物は嘘をつかないからな」

「……わかった風な口利くなバカ、私がどれだけ——」

「鈴ちゃんに依存してたのかって？」

おれの挑発に瀬谷は勢良く立ち上がるが、立ち眩んだようで、うめき声を漏らしながらよろよろ、膝に手をついた。

「運動不足なやつめ。体育をサボるからこうなるんだよ。お前が体育サボるのって、はい二人一組になつてー、が嫌なんだろう？ お前友達いないから」

「——っ！」

瀬谷が体を起こし、手を振りかざしておれを引つ

ばたこうとする。

おれはその手を、攔んだ。

「だから、おれと友達になろうぜ」

「……は？ 何を……言ってるの？」

「言葉通りだよ。思うに、お前には友達が必要だ。

お前に友達がいらないから、鈴ちゃんしかいないから、依存関係が生まれてしまったんだ。動機、お前の為だってさ」

瀬谷は目を見開き、息を呑む。攔んだ手が、一瞬跳ねる。

「鈴ちゃんの狙いは金じゃなくてデジカメだったんだ。木の葉を隠すなら森の中。『大量の金品』によってカムフラージュしたんだよ。そして同時に、お前の罪をも覆い隠した——何言ってるのか、わかるよな？」

三日前、鈴ちゃんは生徒との談話中に、部活の朝練を撮っていた生徒のデジカメに写りこんだ瀬谷を、偶然発見してしまった。先週の事件があった日の朝

の映像。いつも遅い瀬谷が、あの日に限って早く登校していた。しかし、落書きを発見したのはデジカメを持っていた生徒で、瀬谷はその後、いつも通りの時間に教室に入ってきた。それはつまり、瀬谷が犯人ということだ。

「お前を叱って謝らせれば、それで済んだ話なんだよ。でも、出来なかった。お前をこの学校に強く誘ったのは自分、しかしお前は友達も作らず排他的な態度を崩さない。『ホント嫌になる』、『鈴ちゃんがいればそれで良い』、お前は軽口のもりでも、鈴ちゃんは自分を責めていたんだ、自分は大人だから、伊音ちゃんに責任があるから、もし学校を辞めてしまったら私の所為だ、ってな」

そして先生は、瀬谷の小さな罪をより大きな形で覆うことを選んだ。二、三日経ったら匿名で学校に金を送るつもりだった。「あんなことをして後悔しています。盗んだ品物は売ってしまいました、その分のお金も返します」と書き添えて。瀬谷が疑わ

れたのは予想外のこと、しかしそれもすぐに晴れる予定だったのだ。

「外部犯を印象づける為に使った異常者という言葉がお前を傷つけたみたいだが、お前と違って、『そう思ってるから書いた』わけじゃないんだよ」

「嘘……嘘だよ……」

瀬谷は声を震わせながら、怯える子供のような表情を浮かべる。おれが瀬谷の手を放すと、だらりとなんか腕を下げた。

「おれは一個も嘘を言ってない、わかるんだろ？」

瀬谷の泣き腫らした目は、ウサギのように赤い。

どこか、絶すがるように。

「……私は、どうすれば」

「だからここでりっ君登場じゃないか。友達になるんだよ、おれと」

「……友達って、何でそうなるの。キミは、友達要らないって言ってたじゃないか」

「ああ、あれは方針変更だ。おれはさ、この学校に

長くないんだ」

「……え？」

「目的があつて、この学校に潜り込んだわけ。目的を果たしたら転校するのさ。だから、友達は何れなと思つてた。フェアじゃない気がしてね」

おれは早ければ一学期中にもいなくなる。その間、人付き合いの良いやつと一緒にしようと思つた。おれがいなくなつても、問題無くやれる連中と。一般生のおれは学費も高いし、それに――

「――それに、おれは完全な無能力者だからな。ここに居る資格も無いんだ」

瞬きもせずに、瀬谷はおれを見る。

また、視線が透き通る。

「嘘じゃ、ないね」

「お前も、その内いなくなるやつが相手なら気が楽だろ？ その代わり、おれが本当に必要なとした時に、お前の力を貸して欲しい」

「……嫌だと言つたら？」

「普通にバラすよ、鈴ちゃんのこともお前のこともな」

「嘘つき」

ああ、と思わず声を漏らした。そうだ、嘘がわかるんだ。敬太郎や橘花とのいくつかの会話、やり取りが頭をよぎる。冗談めかして言った「友達だよ」

「友達じゃない」も瀬谷は判別出来る。おれはさぞかし嫌なやつに見えていただろう。

「バラさないけど」照れ臭くなり鼻を掻く。「いい加減先生を安心させてやれ。先生が動機を告白したのも自分じゃなくおれを行かせたのも、お前に変わって欲しいからだ」

「……じゃあ」瀬谷の声は、もう震えていない。

「鈴ちゃんは、どうなるの？」

「どうにもならないよ。警察沙汰にもなっていないし、明日には金も返ってくる」

「それなら……」瀬谷の猫目が、一瞬光った気がする。「今キミの口を塞げば……」

「待て待て」一歩後ずさる。「先週の落書き、後悔

してるんだろ？ だから昨日は消そうとしたんだよな？ 鈴ちゃんだってお前を庇いたかったわけだし」

そしておれは真剣な表情を作り、先生に動機を聞き出してからここに来るまでに、言おうと決めていた台詞を口に出す。

「——おれは許すよ。過ちを許すことの大切さを教えたいからな」

決まった。イケメンである。敬太郎、おれはお前の答えを実践してみせたぞ……。

しかし、うっとりするおれに対して瀬谷は。

「私と鈴ちゃんを性的な目で見てるんだね」

橘花の答えを言った。よく覚えてやがる。

「見てねえよ！」

「嘘、だね」

「うう嘘じゃねーよ」

本当に嘘でなくとも、瀬谷に言われると動揺してしまう。

「冗談なのに、怪しいし」

瀬谷は首をかしげ、ほんの少しだけ、笑った。

「ところで」咳払いする。「なんで鈴ちゃんの嘘はわからないんだ？」

話題を逸らしてゐるわけではなく、本当に疑問に思つた。鈴ちゃんにも瀬谷の能力が適用されるなら、どれだけ気をつけても犯行を瀬谷に隠すことは出来ない筈だ。

「……目ざといね」言いながら上目遣いにおれを見る。「……時々いるんだよ、本当に時々だけど、わからない人が。周りにいる人では鈴ちゃんだけ。百人に一人もいない」

「そうか、ほぼ百パーセントっていうのは、確率じゃなくて割合なのか……」

瀬谷はこくりと頷いた。先生とだけいい関係を築けたのは、嘘がわからない相手であることが、多分に関係しているのだろう。

能力を開発研究する織乃学園、Sランカー瀬谷伊音。瀬谷にとって本当に良いのは、その能力が、瀬

谷の斧が錆付くことなのかもしれないと、ふと思つた。

「じゃあ大切にしなきゃな。行こうぜ、鈴ちゃんのところへ。授業サボって待つてるよ、お前を」

「うん。あのさ——」

もによもによと、何かを言った。

「ん？」

おれは瀬谷の顔を覗き込む。

「……なんでもないし」

早足で歩き出した瀬谷の髪が風に揺れ、その合間から少し赤くなつた耳が見えるから、本当は聞こえていたと、つい言いたくなつた。

——ありがとう